

美術教育の背景としてのマレーシアの美術と 美術家について（2）

福田 隆 眞

On the Art and Artists as Art Education in Malaysia: part 2

FUKUDA Takamasa

(Received September 30, 2011)

はじめに

本稿はすでに報告をした「美術教育の背景としてのマレーシアの美術と美術家について(1)」(山口大学教育学部研究論叢第58巻第3部、2008)に続く調査研究の報告である。この研究は、平成23年度科学研究費補助金「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究」(研究代表者：福田隆眞、基盤研究(C)、課題番号：20530826)によるものである。

前回の報告では、マレーシアの1930年代から1970年代までの美術運動の変遷を、美術運動団体と代表的な作家を取り上げて述べた。あわせて専門美術教育機関の歴史的経緯についても述べた。

本稿では、1960年代以降の現在に至るまでのマレーシアの美術運動とその主な美術家について、美術教育の観点から述べる。1960年代以降は、いわゆる、モダニズムとポストモダンの始まりであり、伝統的な美術表現と世界的な運動としてのアバンギャルドの影響に曝される時期でもある。そして、欧米での教育を受けた美術家が帰国して、西欧文化の影響を受ける時期でもある。同時に、西欧文化の影響と併せて、自国の文化の検証を行う時期でもある。そうした美術の近代化、現代化の動きを1970年代から1990年代のまでの絵画表現を中心にして、彫刻、インスタレーション、現代イスラム美術などについても述べる。¹⁾

そして、こうした戦後の美術運動の美術教育に対する影響や関係について、特に中等教育と高等教育について考察する。

1 1970年から1990年代までの美術運動

前回の報告では、マレーシアの1930年代から70年代に至るまでの美術運動の動向を述べた。その間には1957年のマラヤ連邦の独立という社会的に大きな変革があった。本稿では独立後の社会的安定に収束していく1970年代から1990年代までの美術運動の変遷を概説する。

1970年代までに、1965年には、シンガポールがマラヤ連邦から独立し、マレーシアは半島マレーシアと北ボルネオの東マレーシアとなった。さらに70年代直前の1969年5月13日には、マレー人と中国人の激しい民族間暴動が勃発した。このことは1970年代以降のマレーシアの社会に大きな影響を及ぼし、国民文化のあり方、マレー社会、マレーシア国家等の国としての基本

的理念の検討がなされた。その後ブミプトラ政策の実施といったマレーシアの民族と国民の問題が活発になり、そのことが美術活動においても影響してくるのである。

ブミプトラ政策が美術活動に顕著に影響を及ぼした事例の一つと考えられるのは、マラ工科大学 (Institute of Technology MARA, 現在はUiTM:University of Institute Technology MARA) の設立である。マラ工科大学には美術学部が設置され、マレー人のためにマレー人スタッフによって教育が行われている。また、1971年には国民文化協議会が開催され、国民統合のためのアイデンティティの確立、国民文化の確立などの検討がなされた。このことにより、マレーシアはブミプトラと非ブミプトラの区別が鮮明となるのである。さらに、美術活動においては、西洋の美術運動の影響が並行して影響される。マレーと非マレーに加えて西洋の美術文化の影響が混在してくるのである。そして、国民文化に宗教の問題も加わり、マレーシアの国の宗教であるイスラムの影響も美術活動に影響を及ぼすのである。

1970年代以降の美術活動の変遷では、マレーシアと東南アジア諸国との関連とマレーシアのイスラム文化という2つの問題が並行して浮上してきた。さらに西欧の美術文化の影響がこの2つの問題に影響してくるのである。70年代の動向として、具体的には「マレーシア抽象表現」と「新しい状況」のグループの出現である。そこには国際的な美術の状況との調和や一致を保持しようとする兆候があると同時に、1979年のイランのイスラム革命の影響によるアイデンティティの模索の時期に突入したと見られる。美術家は、国、社会、文化、宗教の価値を模索するというスタンスをとるのである。

また、1974年には「形と精神」と題する展覧会が開催され、同時にその書籍が出版された。そこにはマレーシアの工芸作品と美術作品が系統的に紹介されている。²⁾ それは、マレーシアを含む東南アジアにおける伝統的な美術が工芸品であり、国民文化の一つとして伝統的工芸が重要な位置を占めていることを確認している。美術の概念を狭義の純粋美術に偏る傾向にあったものを機能表現、適応表現である工芸作品をも含めた、広義の美術の概念を啓蒙することとなった。

1980年代においては、美術活動はより堅実なものを目指し、抽象美術や形象に内省的な動機や情念を関連付けるのである。そして社会的な問題に対する作品は少し影を薄くし、この時期のマレーシアの現代美術は、イスラムの審美観と西欧の様式への類似の傾向に向かうのである。

そして1990年代には、水彩画の復活が見られる。その表現様式はよりリアリズムとナチュラルリズムに近づき、彫刻やミクストメディアによる作品も現れる。それらの作品は成熟してきており、現代美術の自由な表現を例証している。また、メッセージ性の高い作品も現れてくるのである。

2 美術家と作品の類型化

1970年代から90年代までの美術作品の分類は、年代で記述することも一つの方法であるが、美術による自由な表現を多様な表現媒体によって追究していることを考えれば、表現形式と表現内容を複合したテーマによって類型化することも分類の一つである。そこで、本章は、「場・環境・もの」「寓話・信条・伝統」「歴史・自己・記憶」「抽象・理念・現実」という類型に即して、美術家とその作品の解説を行う。³⁾

（1）場・環境・もの

「場」は特殊な環境によって規定され、「もの」は環境の中に見出される。多民族多文化社会のマレーシアにおいては、物理的な場は多民族の交流の場所である。マレーシアの美術家は彼らが属する環境の中から美術表現のモチーフを探索、発見し、その文脈の中で作品化している。土地や場所の認識は、美術家の様々な先入観、価値観、興味などによって形成される。美術家の多様な創造的態度は、それぞれの文化と経験や印象による影響が関連している。

この類型による表現は、具体的には風景、静物などの具象的表現が多く、それらのモチーフに社会性や理念を付加している。この類型の画家や作品はマレーシアの近代美術の初期から見られるが、ここでは1970年代前後以降を述べる。代表的美術家は以下である。

○ヨー・ジンレン (Yeoh Jin Leng 1929生)：1957年からロンドンに留学し、ロンドン大学を卒業した。トレンガンヌ州で中等学校の教員を勤めながら制作している。マレーシアの自然と有機的な形態に興味を持ち、漁村や農村風景を一点透視法と刷毛のタッチを生かした技法で表現している。代表作「トレンガンヌの稲作地」(1963) (図1)

○ジョハン・マルジョニ (Johan Marjonid 1968生)：1991年にマラ工科大学に入学し、マレーシアの森林やジャングルを描いており、環境保全のメッセージを伝えている。代表作「環境保全シリーズ」(1995) (図2)

○リム・エンホイ (Lim Eng Hooi 1939生)：1964年イギリスに留学。帰国後ペナンのマレーシア科学大学で教育に従事。色彩をトーンで表現することが特徴である。代表作「探検」(1985)

（2）寓話・信条・伝統

マレーシアのような多民族多文化社会においては、様々な文化、信条や伝統が存在している。古くて伝統的なものから、新しい価値観を持った文化も共存しているのが現実である。美術家はそうした多様な文化や信条、伝統、そこから生まれる寓話などを表現の源泉としている。彼らはマレーシア人の豊かで複雑な文化を明確にすることに助力しているのである。代表的な美術家は以下である。

○ニック・ザイナル (Nik Zainal Abidin bin Salleh 1933生)：独学。北クランタン生まれで、ワヤンクリ劇場やワヤン人形制作に従事。ラーマヤナ物語をモチーフにした作品制作をしている。代表作「クランタンのワヤンクリ」(1961) (図3)

○サイ・タジュディーン (Syed Thajudeen 1943生)：インド、マドラスの美術学院卒業。東南アジアの伝統的物語をモチーフとして、アンコールワット、ボロブドゥールなどの作品を制作。代表作「ハヌマンのシタへの訪問」(1972) (図4)

○サイ・アフマッド・ジャマル (Syed Ahmad Jamal 1929生)：シカゴ、ハワイに留学。表現主義とキュビズムの影響を受ける。熱帯の風景、織物による作品、抽象など多様な表現を行う。70年代以降はマレーイスラムの作品も制作。代表作「Tumpal」(1975) (図5)

○アブドゥル・ラティフ・モヒディン (Abdul Latiff Mohidin 1938生)：ベルリン、パリ、ニューヨークなどに留学。ドイツ表現主義から影響される。木版の作品など。代表作「夜明け」(1968) (図6)

○マストラ・アブドゥル・ラーマン (Mastura Abdul Rahaman 1963生)：マラ工科大学卒業。ミクスドメディアによって花などの装飾的な表現を行う。代表作「花の家、調和の家」(1999) (図7)

○ラジャ・ザハブディン (Raja Zahabuddin bin Raja Yacob 1948生)：マラ工科大学からロ

ンドンとカリフォルニアに留学。写真家でありイスラム美術に関係している。代表作「偉大な神」(1991) (図8)

○ハッシム・ハッサン(Haji Hashim Hassan 1936生):60年代にイギリス留学。80年代のマレー中心主義の運動に参加。パティックなどの工芸の技法を活用し、地域の特性を生かした作品制作をしている。代表作「侵入者」(1987) (図9)

○アムロン・オマール (Amron Omar 1957生):1976年マラ工科大学入学。人体解剖などに興味を持ち、代表作のシラッは古代マレーの護身術であり、現代もスポーツとして続いている。マレーの伝統を表現している。代表作「シラッ3」(1980) (図10)

○ロン・ティエンシー (Long Thien Shih 1946生):パリ、ロンドンに留学。マレーシアおよび東南アジアの昔の民衆的な慣わしなどを題材にしている。現実世界を超えた不思議な世界を具象によって表現している。水彩画の復活にも従事した。代表作「見せるための鳥かご」(1987) (図11)

○ジャイラニ・アブ・ハッサン (Jailani Abu Hassan 1963生):マラ工科大学からロンドン、ニューヨークに留学。新表現主義の運動に参加。日常的な対象物で画面を満たし、マレーの生活を表現している。抽象表現主義の様式にも近い。代表作「集合」(1988) (図12)

○バユ・ウトモ・ラジキン (Bayu Utomo Radjikin 1969生):サバ州に生まれ、マラ工科大学卒業。サラワクの地域文化を基にして制作。金属で彫刻作品を制作している。古い慣わしをテーマとしている。代表作「勇敢な独身」(1991) (図13)

(3) 歴史・自己・記憶

歴史は過去を説明し、国家と国民の集合的な記憶や思い出を俯瞰することに役立つものである。マレーシアのように複合的な国家には、多くの民族、様々な歴史と多くの記憶が存在している。古い記憶は祖先につながる遠いところに関係し、新たな記憶は移民や同化融合、国としての向上に関わっている。

複合的な社会では、社会的な緊張により、歴史は多くの変化をもたらす。芸術は国が社会を模索している意味を規定することに役立っている。多民族多文化社会においては、国民文化についての議論が繰り返しなされている。それは美術教育にも影響している。そうした背景の中で、芸術家は自己と他者の関係を模索するために、歴史や記憶、思い出などを表現の根源としている。以下に、代表的な美術家について述べる。

○ズルキフリ・ブヨン (Dzulkifli Buyung 1948生):独学で美術を習得する。水曜美術会のメンバーとして活躍した。マレーシアの子供の遊びや無垢な世界を表現している。代表作「貯金箱」(1961) (図14)

○サムジス・マット・ジャン (Samjis Mat Jan 1952生):マラ工科大学卒業。肖像画家として地位を獲得。マレーシアの都市における若者の現象を表現している。地方から都市への人口流入によって都市が近代化し、社会環境の変化が人々を取り巻いてきている。そうした環境へのメッセージを表現している。代表作「ランデヴー」(1984) (図15)

○イスマイル・ザイン (Ismail Zain 1930生):イギリスに留学。マレーの田舎の伝統的社会的変化に着目し、その生活を描いている。特にマレーの女性をテーマとして、構図やモチーフに特徴のある作品を発表している。代表作「Dot」(1983) (図16)

○イスマイル・ハッシム (Ismail Hashim 1940生):1963年マンチェスター大学入学、1975年マラ工科大学入学、1979年ワシントン州立大学入学。画家として出発したが70年代に写真家に

転向。マレーシア科学大学において教育に従事。高度で芸術的な形態を用いた写真による作品を発表している。手作りの写真技法によって特徴ある作品を制作している。代表作「自転車シート」（1979）（図17）

○レッザ・ピヤダサ（Redza Piyadasa 1939生）：1963年ロンドン、1975年ハワイ大学に留学。複合民族社会のマレーシアをテーマとして表現しており、表現媒体もミクストメディアによるものが多い。マレーシアの様々な民族が融合している状況を新たに記録するだけでなく、古い写真も使用して表現している。マレーシアの日常社会や生活を写真で記録して、リアリズムの表現を行っている。代表作「二人のマレー婦人」（1982）（図18）：複合材料でコラージュの技法を用いている。

○ノーマ・アバス（Norma Abbas 1951生）：1968年マラ工科大学入学、その後、マンチェスター専門学校、ロンドンの美術学校に留学。社会における女性の意味や女性間の関係などを明快な形と色で表現している。技法は描画のほかにコラージュを用い、複合材料によって表現している。代表作「インド・コネクション」（1994）（図19）：複合材料とコラージュの技法。

○エン・フィーチャー（Eng Hwee Chu 1967生）：クアラルンプルのマレーシア美術学院卒業。国内での教育の後、作品制作をリアリズムに近い表現で行っている。女性として、妻として、母としての生活を表現している。彼女の作品には常に生命力やエネルギーが見られる。代表作「豊かな夕食」（1999）（図20）

○コック・ユープア（Kok Yew Puah 1947生）：メルボルンに留学。60年代にオーストラリアに留学し最初は版画を習得、その後、人物表現を主とした絵画に転向した。多民族社会の問題をメッセージとして発信している。学校の子供たちをモチーフにして、民族間の忍耐と理解を鼓舞している。豊かな多民族社会を評価している。代表作「マスクと現代人」（1993）（図21）

○ウォン・ワンリー（Wong Woan Lee 1970生）：1992年クアラルンプル美術短期大学入学。マレーシアの現代の美術は人間の状況を説明しているものが多い。その中で、この画家は複雑で痛切な現実でもある社会問題をテーマとして制作している。代表作「誰も忘れた」（1999）（図22）

（4）抽象・理念・現実

美術界での現代的運動のひとつに、新たなアイデアと感覚表現のための実験と形の追求がある。これは20世紀初頭の西欧の美術運動と産業の発達に伴うデザインの出現によって、実験的な追求が美術においても進んできた。マレーシアの現代的美術もその流れにある。現代の美術の実験は文化横断的内容をも含んでいる。抽象美術、フォルマリズム、ポストモダンなどの運動は、マレーシアの美術家に影響を与えた。代表的な美術家は以下である。

○アワン・ダミット（Awang Damit 1956生）：マラ工科大学を経てワシントンDCのカトリック大学留学。サラワク出身で、その環境が作品に影響している。様々な民族的な形やサラワクの特徴ある形を採り入れた抽象絵画を制作している。そこには民族的色彩、テクスチャーを生かした表現に特徴がある。代表作「まだ現れていない」（1994）（図23）キャンバスに複合材料。

○ファウザン・オマール（Fauzan Omar 1951生）：マラ工科大学を経て、アメリカ、メリーランド美術大学に留学。マレーシア抽象表現主義の運動に参加。80年代にはマレーイスラムの運動も経験している。作品は強いデザインのセンスと手作業のコントロールが見られる。代表作「階層シリーズ」（1982）（図24）複合材料。

○チューン・カムコウ (Choong Kam Kow 1934生)：60年代に台湾師範大学とニューヨークのプラット美術大学に留学。70年代に新構成主義に参加。彫刻作品というよりもオブジェを制作。素材そのものを重視し、磨き上げられた表面は工業製品のものである。ミニマルアートの影響も見られる。代表作「海」(図25) 木材他。

○ヨー・ジンレン (Yeoh Jin Leng 1929生)：1957年からロンドンに留学し、ロンドン大学を卒業した。トレンガンヌ州で中等学校の教員を勤めながら制作。マレーシアの自然と有機的な形態に興味を持ち、漁村や農村風景を一点透視法と刷毛のタッチを生かした技法で表現している。また、陶芸による作品制作も行っている。代表作「アイコンと貴重な地球」(1991) (図26) 陶芸による彫刻。

○ズルキフリ・ユソフ (Zulkifli Yusoff 1962生)：マラ工科大学の後、マンチェスターポリテクニクに留学。多作の若手芸術家である。インスタレーションは見るものを彼の多様な形やイメージ、環境の世界に惹きこむものがある。プリミティブで未成熟な雰囲気を出している。代表作「対話2 (日没に祈るな)」(1996) (図27) 複合材料。

○アズナン・オマル (Aznan Omar 1973生)：マラ工科大学を卒業した若手の彫刻家である。野外彫刻なども含めて現代の彫刻分野は重要視されている。代表作「一滴」(2000) (図28) ステンレス。

3 美術教育との関連

前章までに、マレーシアの1970年代から90年代までの美術活動を概観し、類型化によって美術家を紹介してきた。1960年代までとの相違は、美術表現が多様化したこと、西欧文化の影響と自国の文化の再検討がなされたこと、加えて、イスラム美術の活性化である。こうした美術活動の活性化は、美術教育に関連している。

第一は高等教育での美術教育への関連である。このことについては、マラ工科大学の美術学部が1960年代末に設立され、70年代80年代にはマレー美術の中心的存在となった。その教員には美術家が多く、彼らの影響が学生にも及ぼされた。そして中等教育(中学校、高等学校)の美術教員にマラ工科大学の出身者が増大した。彼らはマレーシアの国民文化の政策に 대응しており⁴⁾、建築、刺繍、染織、ジュエリー、陶磁器などの伝統的文化から技術、装飾、モチーフ、色彩などの影響を受けた表現をしたのである。

中等教育の美術教員の養成は他にはマレーシア科学大学の美術学部でも行われている。その後2000年以降は、スルタン・イドゥリス教育大学が設置され、そこにおいても中等教員の養成が行われ、美術教員の輩出をしている。

第二は欧米への留学生の帰国による影響である。マラ工科大学の設立と並行して、美術を志す学生が欧米に留学した。マラ工科大学で学んだ学生も、その後、欧米に留学して帰国している。そのことにより抽象や抽象表現主義、構成主義をはじめとする現代美術に収斂する美術表現が新たにもたらされた。サイ・アフマド・ジャマルのようにアジア的背景からの影響と西欧の影響を融合させた抽象表現も現れてきた。国際的な流れである現代美術は、より強固な民族的表現とアジア的背景と欧米の融合の表現をもたらした。そして70年代以降の急速な社会変化をしていくマレーシアにおいて、美術表現によってマレーシアのアイデンティティを追究したのである。このアイデンティティの追究による国民文化の確立が、学校教育における教育課程においてもマレーシアの文化を美術教育の基盤としていることに関連しているのである。

第三には学校教育での教材への関連である。中等教育の美術教育の1988年の教育課程では、視覚言語による方法を基本として、美術とコミュニケーション、工芸品、身近な環境の美術を内容としている。視覚言語の習得のためには造形要素と造形原理を系統的に構造化し、その参考作品等において、マレーシアの作品、自然、アジアの作品、欧米の作品など多様に扱っている。工芸品については伝統的なマレーシアの文化を理解することを促している。⁵⁾ これは70年代以降の西欧文化の影響による、視覚言語による美術教育の方法と伝統的工芸の再認識の結果による教材構成とも理解できる。

注

- 1 本稿では主に次の2つの文献を基に考察を進める。
 - ・ National Art Gallery Malaysia, “SUSURMASA Timeliness 1958-2008 ulangtahun”, 2008
 - ・ National Art Gallery & Redza Piyadasa, “Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia”, Balai Seni Lukis Negara, 2002
- 2 マレー語版は“Rupa dan Jiwa”として出版された。本稿では英語版を文献とした。Syed Ahmad Jamal, “Form & Soul”, Dewan Bahasa dan Pustaka, Ministry of Education Malaysia Kuala Lumpur, 1994 ここでは、空間や色についての紹介から始まり、彫刻、木彫、武器、陶器、真鍮製品、銀製品、金製品、織物、刺繍、衣服、遊具、カリグラフィーなどのマレーシアの生活に関連する多様な伝統的工芸品がマレーシアの美術として紹介されている。
- 3 ここでの類型は、National Art Gallery & Redza Piyadasa, “Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia”, Balai Seni Lukis Negara, 2002 の分類を参考とした。
- 4 “Rupa Malaysia A Decade of Art 1987-1997”, Balai Seni Lukis Negara Malaysia, 1998, p28
- 5 Kementerian Pendidikan Malaysia, “Sukatan Pelajaran Sekolah Menengah Pendidikan Seni”, 1988

図版出典

- ・ National Art Gallery & Redza Piyadasa, “Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia”, Balai Seni Lukis Negara, 2002

参考文献

- ・ National Art Gallery Malaysia, “SUSURMASA Timeliness 1958-2008 ulangtahun”, 2008
- ・ Datuk Syed Ahmad Jamal, “The Encyclopedia of Malaysia 14, Crafts and the Visual Arts”, Archipelago Press, Singapore, 2007
- ・ Balai Seni Lukis Negara, “antaramerdeka”, Malaysia, 2007
- ・ National Art Gallery & Redza Piyadasa, “Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia”, Balai Seni Lukis Negara, 2002
- ・ “Rupa Malaysia A Decade of Art 1987-1997”, Balai Seni Lukis Negara Malaysia, 1998

付記：本研究は文部科学省科学研究費補助金に基づくものである。

基盤研究C、課題番号20530826. 「アジア地域における美術教育課程の実質化」
調査研究. 代表者 福田隆真



図1 「トレガンヌ稲作地」
ヨー・ジンレン



図2 「環境保全シリーズ」
ジョハン・マルジョニ



図3 「クランタン・のワヤンクリ」
ニック・ザイナル・アビディン



図4 「ハヌマンのシタへの訪問」
サイ・タジュディーン

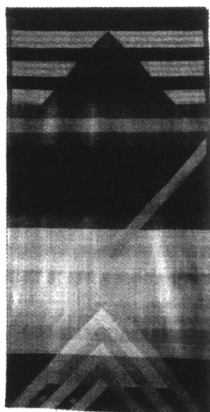


図5 「Tumpal」
サイ・アフマッド・ジャマル

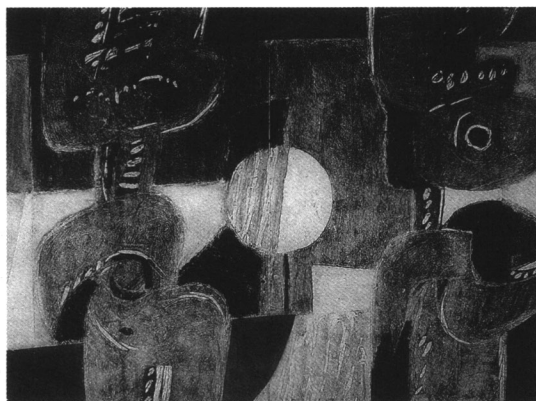


図6 「夜明け」
アブドゥル・ラティフ・モヒディン

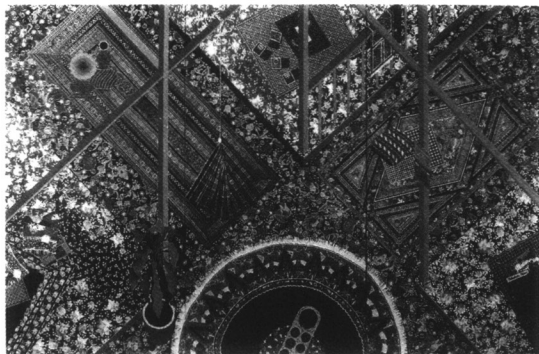


図7 「花の家、調和の家」
マストラ・アブドゥル・ラーマン

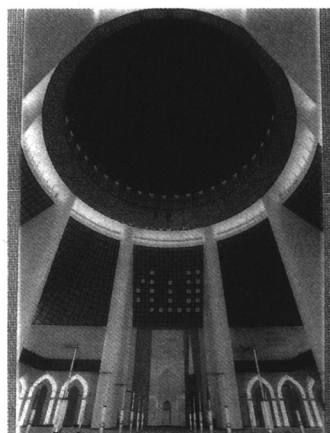


図8 「偉大なる神」
ラジャ・ザハブディン

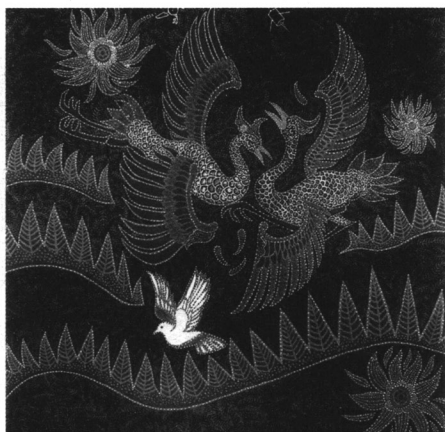


図9 「侵入者」
ハッシム・ハッサン

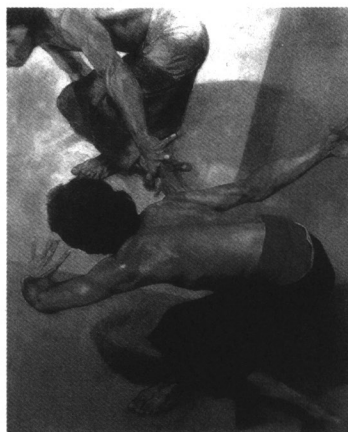


図10 「シラッ3」
アムロン・オマール

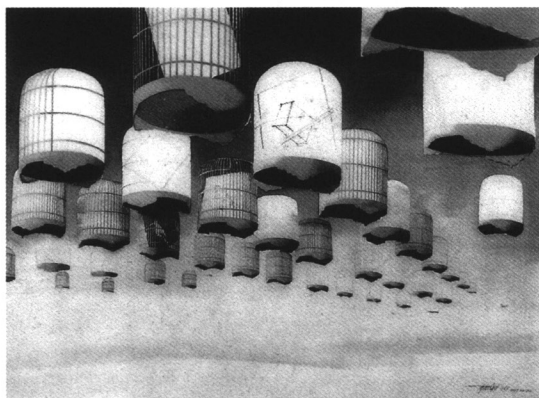


図11 「見せるための鳥かご」
ロン・ティエンシー

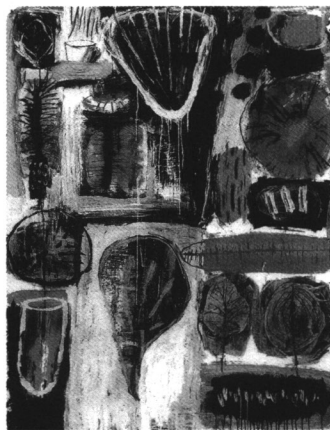


図12 「集合」
ジャイラニ・アブ・ハッサン



図13 「勇敢な独身」
バユ・ウトモ・ラジキン

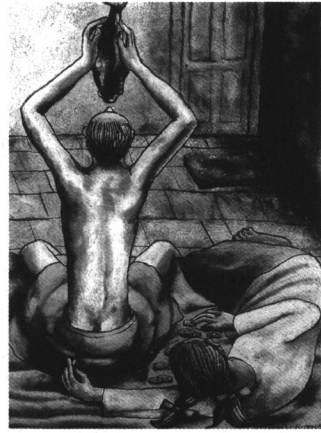


図14 「貯金箱」
ズルキフリ・ブヨン

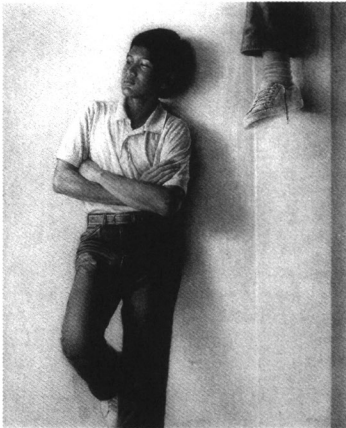


図15 「ランデヴー」
サムジス・マツト・ジャン



図16 「Dot」
イスマイル・ザイン

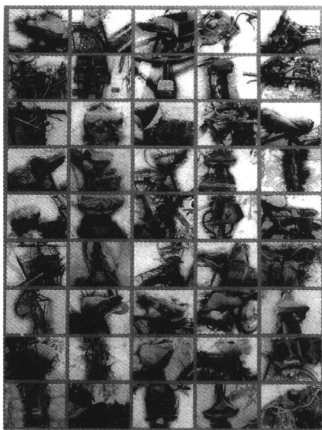


図17 「自転車シート」
イスマイル・ハッシム



図18 「二人のマレー婦人」
レッザ・ピヤダサ

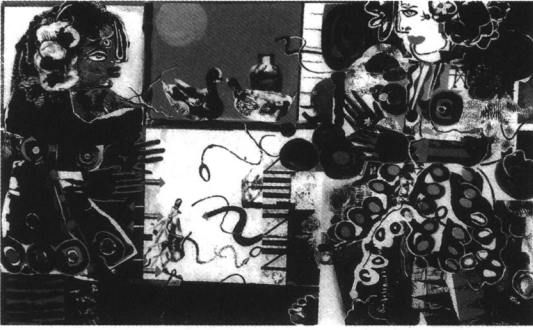


図19 「インド コネクション」
ノーマ・アバス

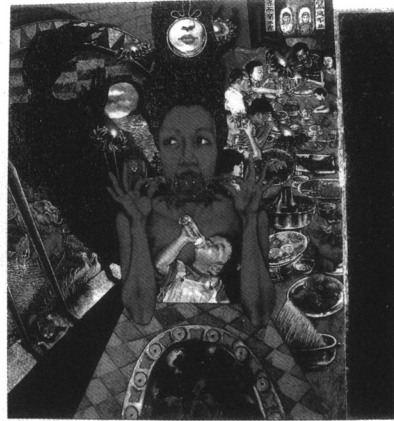


図20 「豊かな夕食」
エン・フィーチャー



図21 「マスクと現代人」
コック・ユープア



図22 「誰も忘れた」
ウォン・ワンリー

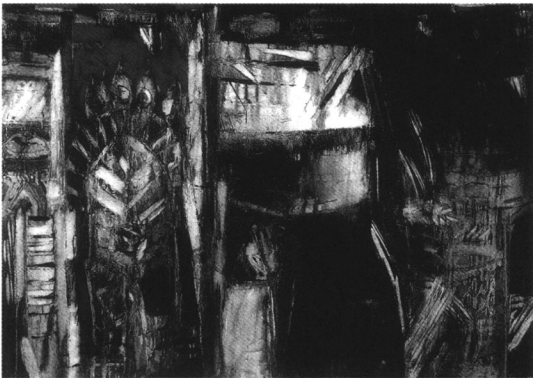


図23 「まだ現われていない」
アワン・ダミット



図24 「階層シリーズ」
ファウザン・オマール

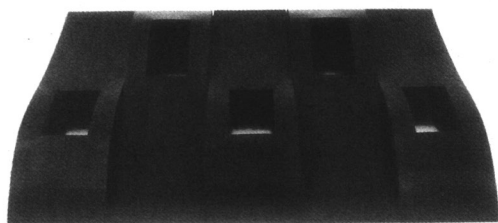


図25 「海」

チューン・カムコウ

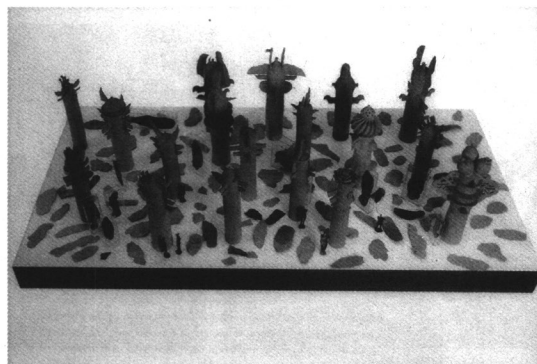


図26 「アイコンと貴重な地球」

ヨー・ジンレン



図27 「対話2 (日没に祈るな)」

ズルキフリ・ユソフ

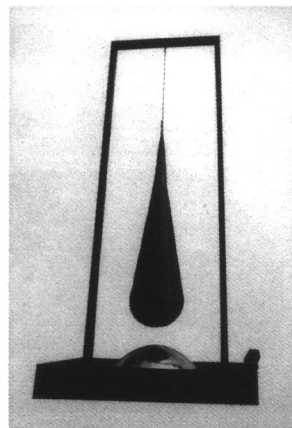


図28 「一滴」

アズナン・オマール